

第21回 I地区仮設住宅訪問記録 平成24年1月24日(火)

訪問者:松下、森、(記録:LLP まち・コミ友田)



今回は大学が期末試験前につき学生は不参加である。私たちが到着すると、集会所にはすでに参加者が集まっており、窓越しに手を振って迎えてくれた。常連が3名、常連になりつつある人2名、3回目参加が1名、初参加が1名と生活支援アドバイザー1名が加わり8名の参加である。

今回は大判のハンカチで巾着袋を作る。ハンカチは松下が百元ショップで購入してきた。和風、洋風、迷彩、水玉、様々な柄のハンカチを前にそれぞれの好みを選ぶのが楽しい。糸の色を選び作業が始まる。参加者の一人が「見ているから、今日はやらないわ」と最初から見学を決め込んでいる。理由に「家に鍵かけてこなかったもの」と言うと、たちまち「やろうよ」「速く鍵かけていらっしゃいよ」と皆に誘われ、ならばと一旦家に戻り共に始めることになる。見ているよりもやってみると何かを感じるものである。ということで、針仕事が苦手な森も指導を松下に任せて見学を決めていたが、今回は作ってみることにした。

三回目参加の高齢女性は血圧測定で集会所を訪れた時と本活動の茶話会とが偶然に重なったことから参加をするようになった。80歳を超えるというのに老眼鏡もかけずに針に糸を通す。見えてはいなくても手指の感覚でできるという。針仕事にはそれほど慣れ親しんできたのであろう。作業の説明を聞くとともくもくと仕事を進めていく。雑巾を仮設住宅に来てからたくさん縫ったと話してくれた。

初参加の女性も針仕事が大好きだと言いながら作業を進める。ミシンを3台、編み物の毛糸もたくさん流されたと言った。被って来た毛糸の帽子がただ一つ流されなかった作品で、お守りのように感じていると皆に見せた。また最近では加齢でこのような作業も上手くできないと言

い、揃わない糸目を「これじゃあ、酔っぱらい運転ね」と言った。それに皆が笑いで返す。互いに手を動かしながらで、真正面から視線を合わせての会話ではない。誰ともなく「ふんふん」「そうですか」と相槌が入る。手が動いている分、口はリラックスしている。運針のリズムで働きかけ、糸こきのリズムで応える。

女性参加者はそれぞれに巾着袋を作り上げたが、生活支援アドバイザーの青年は慣れない手仕事に苦戦していた。ピンクのひときわ華やかな布で作っている。それを周りの女性たちは息子や孫を見るようにほほえましく見守っている。生活支援アドバイザーは針仕事と格闘しながらも、住人の言葉からその人柄、家族関係や抱える悩みを垣間みることになる。また、住民にとっても一度息子のよう感じた支援員には相談しやすいに違いない。

会も終わる頃、集会所の中を窓越しに覗いている高齢男性がいる。横顔がほころんでいる。聞けば初参加の女性の夫であった。妻を迎えにきたようだ。楽しそうにしている妻の姿を見て喜んでいるようであった。3 回目参加の高齢女性にも息子の迎えがきた。巾着袋を自力で作上げた母に寄り添い帰っていった。参加者だけでなくその家族にもこの場の穏やかさ、また小さいながらも達成感のある空気が波のように伝わっていくように感じた。寒い仮設住宅に場のあたたかさがお土産のように持ち帰られた。

今回、常連参加の一人が欠席であった。理由は「お友達とお食事に行くらしい」ということである。森は「被災者」と「お友達とお食事」の結びつきが意外な気持ちが出たと言う。被災者の心がいつも被災地点に留まっていると考えるのは被災していない者の思い込みであり、被災者はすでに 10 ヶ月を経過した日常を生きてきたのだから「お食事」にも当然行くであろうし、そうあってほしいと付け加えた。

帰りに次回活動チラシの配布のために A 地区仮設住宅に立ち寄ったが、毎回欠かさず参加してきた人の表札がなくなっていた。新居が完成し正月を期に移ったのだ。また、参加者の一人は隣家の空き室に娘家族が引っ越してきたという。仮設住宅以外の親戚の家、賃貸住宅などでの暮らしに限界を感じていた人が移動するのも年が新たまったことに関係するのであろう。10 ヶ月の重みである。身体はその 10 ヶ月間の膨大な時を過ごして今にいる。生活の問題を片付けるために動くことだけでなく、食事を作り、針仕事をし、畑を耕し、ジョギングをし、犬の散歩をし、たまにもの作りで遊び、お食事に出かけ、おしゃべりし、そして笑い、そうした坦々とした日常の行動が被災当時の地点に留まろうとする心をそこから引きはがしてきたのではないか。専門外の者が語るのは憚れるが、そうすることで生きることができた被災者がいたのではないかと感じる。

10 ヶ月の時の堆積がある。平成 23 年は地層になった。その上に立つ。本活動の参加者の希望も活動の質も変化する予感がある。